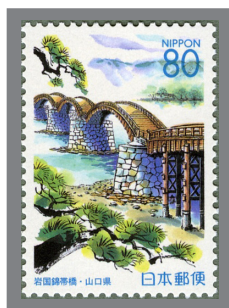


錦帯橋

Bridges of the World

山口県・岩国市



日本・2000年発行

錦帯橋は稀有の橋と言えるでしょう。困難な条件を克服するために生み出された構造の巧みさとそこから醸し出される美しさに感動を覚えます。

錦帯橋は、長州毛利藩の支藩、^{きつかわ}吉川藩の城下町、岩国の武家町と町方の中心部を結ぶ重要な橋です。城下町の発展のためには錦川へ不^{ちぎり}落の橋を架けることが藩主をはじめ岩国藩の人々にとっての悲願でした。その願いが3代藩主^{ひろよし}吉川広嘉の時代によく実現します。

しかし延宝元年(1673)に完成した橋は翌年5月に流失してしまいます。原因は、洪水によって橋脚の石組みが崩れたためでした。直ちに橋は再建されましたが、このとき橋脚の石の間に^{ちぎり}千切を打ち込んで結合を強固にし、あわせて橋脚周辺の河床に上下流100mにわたって石敷が造られました。このような周到な工事によって昭和25年(1950)の台風による洪水によって流失するまで276年の間、持ちこたえることができたのです。

現在の橋は平成16年(2004)に架け替えられたものですが、形状は継承され、橋長は約200m、中央の3径間はス

パン約35mの木造アーチになっています。錦帯橋のアーチ構造は、両側から11段の桁木を順次せり出し、中央の2段の棟木と一体に緊結されて構成されています。各桁が前後にずれないように各々の先端と後端に鼻梁と後梁という2本の横梁が桁を切り込んで組み込まれ、24本の桁が一体に働くようになっています。

この構造は、富山の愛本橋や甲斐の猿橋のような甲信越地方ですでに開発されていた^{はねばし}刎橋の技術が参考にされたと考えられます。刎木と呼ばれる部材の片方を岸の岩盤や土の中に埋め込み、一方を張り出してその上に桁を載せた刎橋では、できるだけ長い距離を跨ぐために刎木を次第に長くして何段にも重ねる方法が生み出されました。刎橋の技術から一歩進められた錦帯橋のアーチ構造は、岩国藩の技術者の天才的とも言えるひらめきによって考案されたオリジナルな構造であると考えられます。

しかしこのアーチの技術は後に他の地方へ伝播することはありませんでした。まさに独創的で、孤高の橋と言えるでしょう。



撮影：松村 博